

治水の歴史

“洪水被害の軽減”から、“洪水を起こさない”へ



写真2-12 現存する信玄堤
(国土交通省関東地方整備局より引用)

堤防の近くにある木の枠は聖牛せいぎゅうと呼ばれるもので、川の流れを抑えて、洪水による流下物から堤防を保護するために設けられています。



図2-5 霞堤の仕組み

霞堤は堤防に切れ目があります。

この切れ目には、洪水時に大きな被害を防ぐ効果がありました。

治水とは、洪水による被害から人々や地域、生活を守るために行う事業のことをいいます。

明治以前は、各地を治めていた武将や大名などによって、地域ごとに治水事業が行われていました。有名なものは、武田信玄が釜無川・しんげんづつみ 笛吹川につくった信玄堤かすみでいという堤防です。霞堤という堤防(図2-5)をつくり、洪水が起こっても被害が大きくならないように工夫していました。

明治以降は西欧を中心とした近代の技術が取り入れられ、より丈夫な堤防をつくったり、ダムなどによって川の水の量を調整することができるようになりました。全国の主要な川で次々と治水事業が進められ、昔に比べて洪水が起こる頻度が少なくなりました。

埼玉県東部にある首都圏外郭放水路も、土木技術の発展が生み出した治水施設です。地下約50メートルに洪水を流すためのトンネルをつくり、大雨時などに宅地等へ浸水することを防いでいます。トンネルを流れた水は巨大な水槽によって勢いを弱められ、最終的にはポンプによって吸い上げられて江戸川へと排出されます。

写真2-13 首都圏外郭放水路の調圧水槽
(国土交通省江戸川河川事務所より引用)

水の勢いを弱めるための調圧水槽。広々とした空間に柱が並ぶ光景から、「地下神殿」と呼ばれています。

